

論文

ソーシャルワーク実践における援助関係 に関する考察

——西田哲学を手がかりに——

羽鳥恵一[†]

要約：クライアントとソーシャルワーカーとの関係はソーシャルワーク実践の基本とされるが、近年ではクライアントのスピリチュアリティへの配慮が求められるなど、改めて両者の関係性を検討する必要性が生じている。本稿では、ソーシャルワークの実践に関する先行研究を整理し、共感と信頼、パートナーシップといった関係性、スピリチュアリティへの配慮について概観した。その上で、西田哲学の概念を用いて両者の関係性を再考した結果、ソーシャルワーカーには、我執を棄ててクライアントと人格的に応答し、スピリチュアリティを契機に、自己の内で行為直観的にクライアントと合一しつつも、常に反省するあり方が求められることが明らかとなった。

キーワード：ソーシャルワーク実践、関係性、スピリチュアリティ、省察的实践、西田哲学

目次

1. 背景と目的
2. 先行研究の検討
 - 2-1. 共感と信頼
 - 2-2. パートナーシップ
 - 2-3. スピリチュアリティへの配慮
3. 研究方法
4. ソーシャルワーカーの意識と西田哲学との関連
 - 4-1. 純粹経験
 - 4-2. 場所
 - 4-3. 私と汝
 - 4-4. 自覚と行為直観
 - 4-5. 宗教意識
5. 考察及び今後の課題
 - 5-1. 西田哲学に基づくソーシャルワーカーの意識
 - 5-2. 本研究の限界及び今後の課題

[†]同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程

*2022年5月17日受付、査読審査を経て2022年11月10日掲載決定

1. 背景と目的

ソーシャルワーク実践は、自明のことであるが、クライアント（以下、CL）とソーシャルワーカー（以下、SWr）との関係のもとに成り立っている。ソーシャルワーク実践の現場においては、「関係の中でCLを支える」などとも言われ、CLに望ましい結果を生じるためにも、SWrとの関係は重要な要素の一つになると考えられる。

援助関係の重要性については、ソーシャルワークの歴史の中だけでなく、実践現場でも当たり前のこととして捉えられてきている。例えば、横山登志子はベテランのSWrによる職業アイデンティティとして、「知識や理論だけではなく情報や常識を総合的に活用しながら、解決にむけて利用者と共に歩むような専門家をめざしている」（横山2008: 203）とし、SWrの援助観が生成される過程における援助関係の重要性を指摘している。また大谷京子は、CLとSWrとの援助関係が「適切な援助には不可欠」（大谷2012: 80-81）と述べ、エキスパートと呼ばれるベテランのSWrによるソーシャルワーク実践における援助関係に関する検討を行っている。これらの先行研究は、エキスパートのSWrがソーシャルワーク実践において、いかにCLとの関係を意識しているかを窺い知ることができるものである。

特に近年では、2020年に日本ソーシャルワーカー連盟（JFSW）倫理委員会によって「ソーシャルワーカーの倫理綱領」の改定案がまとめられ、その中に「ソーシャルワーカーは、すべての人々を生物的、心理的、社会的、文化的、スピリチュアルな側面からなる全人的な存在として認識する」（日本ソーシャルワーカー連盟HP）という条文が新たに設けられることとなった。このことから、ソーシャルワーク実践の現場では、SWrにはCLのスピリチュアルな側面をも含めた関係形成が求められるようになってきており、CLとSWrとの関係は、ソーシャルワーク実践においてより重要性を増してきていることが理解できる。また、ソーシャルワーク実践においてジェネラリスト・ソーシャルワークが主流となる中、CLのニーズを多角的に分析する視点や、ミクロ実践からメゾ・マクロ実践までをも包括する視点など、いわゆるSWrの想像力や創造性が重要視されるようになってきている（Johnson & Yanca = 2004）。これに対して、平塚良子はSWrの内なる世界における実践知（アートの知）を可視化すべく、「7次元統合モデル」を提唱している（平塚 2022）。このように、実践知を統合して実践に活用するようなSWrの想像力や創造性、内的思考やその可視化が重視されている一方で、ここではそれらがいかんして生起するのかに関する言及は見られない。特に、SWrが実践的推論を行う際には感覚や直観なども重要な要素になると思われるが、「7次元統合モデル」においては、これらは「内的スキル」に収斂されており、属人的技術に留ま

っているようにも見える。筆者は、このような SWr の想像力や創造性、感覚や直観といった SWr の意識こそ、ソーシャルワーク研究の俎上に載せるべきではないかと考える。特に CL と SWr との関係性、CL を前にしてソーシャルワーク実践に当たる SWr の意識について明らかにする必要があるのではないだろうか。

本論では、このような問題意識のもと、まずは CL と SWr との相互関係について、先行研究を紐解くことで明らかにしていきたい。特に、CL と SWr とのパートナーシップと呼ばれる関係性や、スピリチュアリティに基づいた関係性について検討を行うことにより、両者の関係性を整理するとともに、その限界を明らかにしたいと思う。その上で本研究では、改めてソーシャルワーク実践における CL と SWr の関係性を分析するとともに、実践に当たる SWr の想像力や創造性、直観などといった意識についての整理を試みる。それに当たり、筆者は西田哲学が大きな示唆を与えうると考えているため、本研究では西田哲学を用いることでソーシャルワーク実践における SWr の意識を分析してみようと思う。

なお本論では、CL と SWr との相互作用を指す場合を「関係」、その相互作用の内容や質、状態を指す場合を「関係性」と操作的に定義し、それぞれを区別して用いることにする。

2. 先行研究の検討

ここでは、ソーシャルワーク理論における CL と SWr との関係に関する議論を概観することにより、両者の関係のあり方について検討を加えてみたい。

2-1. 共感と信頼

ソーシャルワークの母とも呼ばれるリッチモンド (Mary E. Richmond) は、「初回面談」の目的を CL との「良好な理解関係を確立すること」(Richmond=2012: 72) と捉え、効率的な「社会診断」を行うために、SWr には CL の「パーソナリティに対する本能的な畏敬の念と、人間として人間に向けられる暖かい人間的な関心」(Richmond=1991: 163) が必要と指摘している。さらに、CL のパーソナリティの成長のためには、「ケース・ワーカー自身にとってもパーソナリティの成長が必要」(Richmond=1991: 163) とも述べており、CL と SWr との関係を相互的、互恵的な関係と考えている。このようなリッチモンドの議論を踏まえ、ハミルトン (Gordon Hamilton) は、「ワーカー＝クライアント関係が人々の自助を助長する上に重要」(Hamilton=1960: 43) とし、ソーシャルワーク実践における両者の関係を重視している。特に、精神分析による転移－逆転移関係を踏まえ、SWr は「自己がどのように作用するかということに気づいて

いなければならない」(Hamilton=1960: 64)として、SWrの自己認識の必要性を指摘する。このような理論をさらに発展させたのがホリス(Florence Hollis)であるが、ここでは「ケースワーク処置全体の基礎となるものは、ワーカーとクライアントとの関係(relationship)である」(Hollis=1966: 190)とされ、両者のコミュニケーションの問題やSWrの態度や応答の問題、その関係性が、転移-逆転移による力動的関係として捉えられている。その上でホリスは、心理社会的ソーシャルワーク実践理論を展開している。このような診断主義的アプローチに対し、機能主義的アプローチの立場を取るのがaptekar(Herbert H. Aptekar)であるが、ここにおいても両者の関係は「ケースワークは、クライアントとワーカーの関係(通常、ある程度友情の特徴をもっているが、しかし、友情とはまったく違う関係)を除外しては、実施することができない」(Aptekar=1968: 51)とされ、ケースワークの基礎として位置づけられている。しかし、その関係性は能動的かつ力動的である側面が認められる一方で、あくまでケースワーク機能を遂行するための手段であり、それ自身が目的なのではなく、「機能に従属するものでなければならない」(Aptekar=1968: 61)とされる。さらに、診断主義と機能主義の折衷を目指したパールマン(Helen H. Perlman)においても、ケースワークの過程は両者の関係を用いたものでなければならないとされ、CLの問題解決といった目的を達成する過程において、「ケースワーカーとクライアントが共に働かねばならない」(Perlman=1958: 69)関係が重視される。また、バイステック(Felix P. Biestek)においても、「援助関係はケースワークという臨床過程そのものに流れをつくる水路(channel)」(Biestek=2006: 4)と位置付けられ、両者の情緒と態度による力動的相互作用が重視される。このように、いずれの立場においても、ソーシャルワークの創成期から、CLとSWrとの関係はソーシャルワーク実践の基礎と位置付けられ、重要視されてきたことが理解できる。しかし、いずれの理論もSWr側の態度や情緒的関心に特化した議論であり、援助関係は両者の相互関係とされつつも、あくまでSWrの姿勢が問題とされている。ここではCL側の要素は想定されておらず、このことについて大谷は、「二者関係であるにもかかわらず、専門職側の要件のみがテーマとなるのは、パターンリスティックな援助関係を前提とした場合に成立する議論」(大谷 2012: 82)と批判している。

確かに、CLとSWrとの関係形成におけるSWrの態度は重要な要素であり、それなしには関係そのものは成立しないであろう。しかし、CLとSWrの関係は、相互的・互恵的関係でもある。であるとすれば、両者の良好な関係を形成するには、CLが求めるSWrの要件も検討する必要があると考えられる。このような視点から、例えばBlandらは、複数のグループに所属するCLに対してインタビューを行い、SWrに期待する態度として、CLに対して敬意、誠実さ、忠実さ、共感、思いやりなどを示すこと、忍耐、信頼性、非審判的態度などを持って専門職としての業務にあたること、共に

過ごす時間を割くことなどの姿勢を明らかにしている (Bland et al. 2006)。また, Kirshらによれば, SWr の支援を受ける利用者へのインタビューをもとに, CL が望む SWr のあり方として, 近づきやすさ, 定期的な連絡, 積極的な傾聴, 非審判的態度, 共感的励ましなどといった CL に寄り添う姿勢, CL のニーズを把握し, 危機を回避することによる CL を理解しようとする姿勢, 互いの違いを尊重し, CL の幸福を希求するといった承認や思いやりの姿勢, 個人の成長や意識の向上, 自己洞察や自信の促進といった前進する姿勢を明らかにしている (Kirsh & Tate 2006)。大谷も, CL へのフォーカスグループインタビューを通じて, 人生の手助けになるような援助をしてほしいというニーズや援助内容そのものへの希望, 専門職としてのポリシーや社会経験を持ち, 自身の成長を希求するような SWr の姿勢, CL と対等でありつつも, 「ピアでありソーシャルワーカー」であるという関係を望む CL の声を明らかにしており, こうした意見を受け入れ, SWr が CL と対等な関係としてパートナーシップを形成する必要性を指摘している (大谷 2012)。

このような CL から望まれる SWr の姿勢のうち, 特に共感 (empathy) はソーシャルワークの創成期から重視されてきた概念の一つと考えられる。ソーシャルワークにも影響を与えたとされるロジャーズ (Carl R. Rogers) は, 共感 (empathy) について, 「クライアントの私的な世界を, あたかも自分自身のものであるかのように感じとり, しかもこの“あたかも……のように” (as if) という性格を失わない——これが感情移入 (empathy) なのであり, セラピイにとって肝要なものである」(Rogers = 1966: 127) と述べている。また, Keefe は, 共感の過程を, CL の身体感覚や思考を理解し, 行動のきっかけを明確に把握し, それによって SWr に直接引き起こされる感情反応を認識し, SWr の認知プロセスを一旦停止して CL と SWr の共有した感情を分離し, 複合的な反応としてフィードバックする, といった一連の流れとして説明している (Keefe 1976)。さらに Freedberg によれば, 共感には SWr が CL の感情や状況を理解するだけでなく, CL がその現実に起因する意味を理解することが求められるとともに, SWr が CL の情緒的な状態と考えに気づき, 経験し, それに応答すること, つまり他者の見方を理解し, 知覚する能力として捉えられている。その上で, 共感を CL と SWr との相互関係の中に位置づけ, 「相互共感」という概念を提唱している (Freedberg 2007)。このように, 近年では, 共感 は CL と SWr との相互関係の中で捉えられるようになってきていると言えるであろう。

また, CL と SWr との信頼関係についても, その重要性が指摘されて久しい。例えば大塚達雄は, ソーシャルワークにおける専門職業的対人関係における信頼関係をラポールと位置付け, 「ケースワークにおいては, ラポールをつくり上げることが, ケースワーク過程を成立させる必須条件となる」(大塚 1960: 30) と述べているし, 岡村

重夫も、古くから CL と SWr の信頼関係が重要視されてきたことを踏まえ、「社会福祉的援助は、この援助者と被援助者との間に結ばれた信頼関係をとおして行われなければ成功しない」（岡村 1983: 142）と指摘している。さらに、狭間香代子は社会構成主義の立場から対話に基づく対等な関係を重視し、SWr は「専門職として利用者からの社会的承認を得た上でのみ成り立つ」（狭間 2001: 115）と述べている。また、Kirsh らによれば、CL を信じ、自らの強みを同定し、適度な挑戦と期待を引き受ける SWr の能力が、内省、教育、研究を通じて開発されなければならないとされる（Kirsh & Tate 2006: 1070）。ここでは、信頼関係を CL による SWr への信頼だけでなく、SWr による CL への信頼をも含んだものとして捉えていることが理解できる。ここに至って、信頼関係は両者の「相互信頼」へと移行する。佐藤俊一も、SWr が CL を見ているだけでなく、CL も SWr その人を見ることで信頼を形成していくのであり、SWr にはそのことを理解した上で、「相互に見る」という姿勢が重要になると指摘している（佐藤 2004: 34-35）。このような信頼関係については、大谷も、信頼関係の意味や内容が時代的に変遷することを前提に、①SWr の専門知識と技術に対する信頼だけでなく、人としての信頼を含むようになった、②信頼は、CL から SWr への信頼だけでなく、SWr が CL の可能性や力を信頼することを含むようになった、③ワーカーが CL を信頼しつつ、CL に聴き、相互に影響を与えつつ共に成長することを意味するようになった、と指摘している（大谷 2012: 90）。

2-2. パートナーシップ

CL と SWr による「相互共感」や「相互信頼」により、「対等な関係に基づく協働的専門性」（狭間 2001: 125）が生じることになるが、これを両者のパートナーシップの関係と位置付け、その関係性について検討してみたい。

久保紘章は、セルフヘルプ・グループの分析を通じて、「パートナーシップは、当事者の人たちと『人間として対等である』ことが原点」（久保=2004: 146）とし、これによって本当の援助とは何かが問われ、専門職が自己改革を迫られるとしている。Compton らによれば、パートナーシップとは CL の自己決定に関する話し合いを含むものとして捉えられ、パートナーシップを実現するためには CL と SWr との平等性と個々の多様性が重視されている（Compton & Galaway 1999）。また、Scheyett らによれば、パートナーシップとは、SWr と CL が平等にそれぞれの強みと専門知識の領域を持ち、自律性と選択を行使する能力を備えた者同士による協働のプロセスとして概念化されている（Scheyett & Diehl 2004）。さらに、マアー（Janet A. M. Meagher）によれば、「パートナーシップは共通の目標に向かって協働することを意味し、互いの技術、知識、ストレングス、能力を学びあいながら進めて」（Meagher=2015: 46）行くものと

され、本物のパートナーシップにはコンシューマーの積極的な参画が必要としている。なお、稲沢公一はこのようなパートナーシップを「ポスト専門職的關係」と位置づけ、「クライアントと援助者とが対等な立場で『ともに』『一緒に』改善をめざす」（稲沢 2017: 91）立場と位置付けている。

しかし、CL と SWr との関係は、SWr に知識や技能があり、職務上の権限も与えられているため、決して対等になることはない。場合によっては、CL が SWr の采配のもとに置かれ、SWr に依存することにより、自身で対処する力が奪われることにもなりかねない。岩崎晋也は、だからこそ援助理念としてのエンパワメントが重要で、「『クライアントをエンパワーすることが援助者自身をエンパワーすることになる』といった相互的かつ対等な関係性が生じることになる。そして、これらのパワーの共有や対等性、相互性といった理想的な特徴を含む援助の関係性がパートナーシップなのである」（岩崎 2014: 265）と述べている。マアもまた、パートナーシップ形成のための要因として、①力を持っている人が下向きに力を分かち合う、②サービスを受けている人が経験を上向きに分かち合う、③双方が学び合うことにより互いの経験を分かち合い、積み重ねていく、という3点を指摘している（Meagher = 2015: 24）。

であるとすれば、SWr が自身のパワーや権威性に気づくためには、アンダーソン（Harlene Anderson）とグリーンシャン（Harold Goolishian）が言うような、CL こそが専門家であるといった、専門職の無知の姿勢（Anderson & Goolishian = 1997）が求められることになるであろう。横田恵子は加茂陽との対論の中で、SWr の「相互変容」「相互開放」を重要視し、CL から向けられる猜疑のまなざしを認める勇気を持ち、CL の鋭敏な感覚に敬意を表し、知識で対抗するのではなくその感覚を頼りにして、SWr が「変化を恐れない少しの勇気と、他人から専門家と呼ばれなくてもよい、という少しの諦め、人々への強い関心とものごとへの傾注心（compassion）」（加茂ら 2003: 209）を持ちさえすれば、「信頼と協働のワーク」は実践できると述べている。

であるとすれば、このような姿勢で実践を行うためには、どのような過程が必要になるであろうか。例えば久保は、「いわゆる『専門家』『援助者』は、当事者の重さの前で、一度は、自らの専門性が色あせるほどの経験、無力になる経験をする必要があるのではないか」（久保 1988: 227）と述べ、援助者の無力感や自身の当事者性の自覚から、当事者に学ぶ姿勢を重視している。また、尾崎新は、SWr の価値観や判断が葛藤する「ゆらぎ」という概念を提唱し、SWr が「ゆらぎ」から逃げずに向き合い、いたずらに自己否定せずに、他者の意見をも踏まえて「ゆらぎ」を客観化しつつ、「ゆらぎ」に直面している自己自身を CL に素直に開示することで CL の理解を深めるような過程を提示している（尾崎 1999）。さらに横山は、「無力さや限界を知らされるようなインパクトのある体験で、ネガティブな情緒的体験」（横山 2008: 134）としての「疲弊体

験」により、SWr はひとたび獲得した自己効力感が否定され、理想のイメージと自己との隔たりに気づくとともに、ぶれながら安定するとしている。

このような SWr の葛藤について Horowitz は、CL と SWr との相互関係において、CL の自己の変化に対する SWr の敬意を高めるには、SWr が自身の態度と価値観の源を明らかにするとともに、自己変革に必然的に伴う苦痛を認めなければならないとする。その上で、CL とともに苦しむだけではなく、自己のあり方にも葛藤する SWr の姿が、自分自身の人生を生き直そうとする CL に希望をもたらすとしている (Horowitz 1991)。これは、『浦河べてるの家』に見る「弱さを絆に」という考え方にも通じる。「弱さには弱さとして意味があり、価値がある」(浦河べてるの家 2002: 196) のであり、「弱さの情報公開」(浦河べてるの家 2002: 196) をすることで、相互の助け合いを生むのである。これは CL だけに求められる姿勢ではなく、「べてるに来れば病気が出る」(浦河べてるの家 2002: 170) と言われるように、専門職を含めた誰にでも求められる姿勢である。『浦河べてるの家』では、このように援助者-被援助者の枠組みを超えた、「弱さを絆」とした相互援助関係が文化として根付いていると考えられよう。大谷もまた、「ワーカーにはひとたび1人の人間としてクライアントと出会うこと、そして痛みを伴いつつ無力のなかで踏みとどまること、そこでクライアントとともに再度、双方の役割を構築しつつ目標に向かうことが必要」(大谷 2012: 94) と述べ、パートナーシップのレベルとして、共生、対等性・相互性、共通の目標と協働、目標の共有と協働という段階を提示している。

2-3. スピリチュアリティへの配慮

ソーシャルワークの現場において SWr が出会う CL は、自己の存在の意味や希望、孤独や他者からの承認の狭間で葛藤し、苦しみや傷つきを経験している可能性がある。Horowitz が指摘するように、SWr が CL の実存的痛みを目の当たりにしたとき、その苦痛を認め葛藤する SWr の姿が、自分自身を変革したいと願う CL に希望をもたらすことになり、結果として、CL が目的の実現、信仰の更新、自尊心の目覚めに価値を見出すことになる (Horowitz 1991)。このように見ると、CL と関わる SWr には、CL のスピリチュアリティに配慮するとともに、自身のスピリチュアリティに対する気づきが求められることになると考えられる。

スピリチュアリティについては、カンダ (Edward R. Canda) らが「人間存在とその文化の普遍的特質を指し示すものとして、すなわち、意味、目的、道徳性、超越、ウェルビーイングの探究や、自分自身・他者・究極的实在との深遠な関係の探究にかかわる特質を指し示すもの」(Canda & Furman = 2014: 5) と定義しており、木原活信もまた、スピリチュアリティを「人間を超越する存在との関係性を創生するもの、人間存在の意

味を創生させるものの総称」(木原 2003: 13)と位置付け、社会福祉領域におけるスピリチュアリティを、「①人間の4側面(心理的, 身体的, 社会的, 霊的=スピリチュアル)の一つという側面的理解, ②人間の全体性を包含するもの, ③人間の核であり, その根源をなすもの」(木原 2021: 101)と捉えている。

スピリチュアリティとは、狭義には宗教や宗教意識との関連で捉えられる傾向があるが、それだけに収斂されるべきものでは決してない。例えば、窪寺俊之は、癌患者の闘病記を分析することで、一人称の死を前にした時に「誰しものが超越的なもの(神仏)に救いを求めている」(窪寺 2004: 57)傾向を指摘するとともに、「死の危機はスピリチュアリティを覚醒し、達成不可能になったそれまでの人生の意味や目的に代わって、新たな意味や目的を見つけ出そうと働く」(窪寺 2004: 13)と述べている。ここでは、スピリチュアリティが宗教よりも広義なものとして捉えられている。林貴啓もまた、スピリチュアリティを「自分の存在の意味、生死への実存的関心、大切な人を失った悲嘆への向き合いといった人生の根源的な関心事に真摯に向き合う姿勢」(林 2011: 202)と捉え、スピリチュアリティを「答え」ではなく「問い」の位相に引き戻して考えることを提起し、「スピリチュアルな問題が誰にとっても大切だということについて、社会的に広く認識が共有されることが大切」(林 2011: 201)と述べている。以上のように、スピリチュアリティとは人生の根源的問いであるとともに、特に一人称の死といった危機に直面したとき、誰にでも感じられるような性格のものであると考えられるのである。

このように広義に捉えられるスピリチュアリティについて、西平直は「宗教性」「全人格性」「実存性」「大いなる受動性」の4つの位相に分類して分析している(西平 2007)。「宗教性」とは、WHOが1998年に新しく提案している健康定義において、「心理的」「身体的」「社会的」の三領域に追加された第四の領域と理解できるものである。その一方、スピリチュアリティは第四領域に留まるものではなく、「心理的」「身体的」「社会的」のすべてを含み込んだ、個人の総体としての「全人格性」をも意味する。この場合の「全人格性」とは、個人が生きる日常生活の全体性はもちろんのこと、世俗を離れた人生の意味や個人を取り巻く自然や死者との繋がりといった深みまでも含んでいる。そして、そのような人生の意味は、個人の「実存」に関する問いともなる。特に、一人称の死に直面したとき、自らの生のあり方が改めて大きく問われることになり、人生の意味に大きな転換がもたらされる。しかし、このような事態は、能動的に感受できるものではなく、まさに突然、思わぬ形でもたらされるようなものである。そして、そのような気づきは「生かされてある私」の自覚にも繋がる。つまり、実存的に生きる私が、聖なるものとの出会いによって生かされる感覚である。このとき、外なる大いなる自然、世界との一体感が生まれる。ここにスピリチュアリティの「大いなる受動

性」が現れることになる。なお、これらの4つの位相は、それぞれが独立して捉えられるのではなく、様々に矛盾しつつも関連しあっている。このように、スピリチュアリティは一様なものではなく、多義的に理解することが可能なのである。

CLとSWrの関係においても、「ソーシャルワーカーの倫理綱領」に見るように、CLのスピリチュアリティに配慮することが求められるようになってきている。そのとき、SWr自身にもスピリチュアリティへの気づきが求められることになるが、例えば佐藤は、「孤独、不安、別れなど、誰もが避けたいと思うことが、実はスピリチュアリティを目覚めさせる人間的体験である」（佐藤 2020: iv）と述べ、苦悩や不安の中にこそ、スピリチュアリティに気づく契機があるとしている。このようなスピリチュアリティの気づきについては、グロフ（Stanislav Grof）らがスピリチュアル・エマージェンス（spiritual emergence）とスピリチュアル・エマージェンシー（spiritual emergency）という概念を用いて説明している。本来、スピリチュアリティの気づきは、時にはほとんど感じ取れないほどに微細で緩やかに進行していく。グロフはこれをスピリチュアル・エマージェンスと呼んでいる。しかし、一たび強い感情的体験や深刻な喪失体験などに直面すると、こうした気づきが急速かつ劇的にもたらされ、極端な場合には自らに危機的状況を招く可能性がある。グロフはこれを、スピリチュアル・エマージェンシーと呼ぶ。これは、「その人間の存在全体に関わる深い心理的変容をもたらす、苦難として体験される決定的な諸段階」（Grof & Grof=1997: 61）であり、このような危機的状況に直面すると、日々の生活や未知の状況に対して恐怖心を感じるとされる。スピリチュアル・エマージェンシーにより、「実存的危機に陥ると、深層の自己、高次の力、神といった存在（中略）から切り離されたと感じる。その結果はどうしようもない絶望的な孤独、その人の全存在を貫く完全かつ徹底的な実存的疎外」（Grof & Grof=1997: 96-97）をもたらすことになるのである。しかし、カンダも「人間がその過程をくぐり抜ければ成長をもたらす可能性がある」（Canda & Furman=2014: 412）と指摘しているように、それをうまく乗り越えることができれば、より充実した生き方を再構築する可能性が開かれるのである。スピリチュアリティの気づきは、スピリチュアル・エマージェンシーに見るような実存的危機を契機としてもたらされると考えられるのである。

SWrがCLのスピリチュアリティに配慮するためには、このような自身のスピリチュアリティへの気づきが重要になる。そのためには、SWrの自己覚知が重要になるが、例えばFreedbergは、CLとの「相互共感」のためには、SWrの専門的なトレーニングを通じて、自分の実践において鋭く自己認識するとともに、倫理的な成熟した個人であることが求められるとしている（Freedberg 2007）。Keefeは、共感的なスキルを強化するためには、瞑想が効果的とも述べており（Keefe 1976）、このような工夫により、SWr自身のスピリチュアリティへの気づきと同時に、CLのスピリチュアリティへの配

慮がもたらされるのである。いずれにしる、CLのスピリチュアリティに配慮した関係には、例えば市瀬晶子が、「何らかの関係性のなかに生かされているという、人間としてのありのままの『弱さ』に立つとき、初めて、身を寄せ合う関係を喪失した人の傷を共に痛むことができ、弱さや傷をもちながらも共に生きる他者としての絆が生み出されていく」（市瀬ら 2013: 253）と述べているように、CLとともに傷つくSWrの感受性が重要になると考えられる。これはいわば、レヴィナス（Emmanuel Lévinas）が「可傷性そのものが感受性にほかならない」（Lévinas=1999: 183）と述べるような感受性であり、このような「可傷性」が「他人のために」「他人の代わりに」といったあり方を可能にすると考えられるのである。CLのスピリチュアリティに配慮したCLとSWrとの関係性は、このような共に傷つく「可傷性」を基に形作られるのである。

3. 研究方法

以上これまで、先行研究を概観することにより、「相互共感」「相互信頼」を基礎としたパートナーシップに基づくCLとSWrの関係性について検討を行った。また、その背後にあるスピリチュアリティを紐解くことで、弱さや痛みをもちながら共に生きる他者としてのSWrのあり方を明らかにすることができた。しかし、これらの議論では、CLの痛みを受け止めるSWrの感受性や想像力がいかに生じるのか、CLと向き合う中で、いかにして痛みを共にするのかなど、そこでのSWrの意識については明らかにされていない。そのため本研究では、ソーシャルワーク実践においてCLと向き合うSWrの意識について、特に西田哲学を用いることで、分析を加えてみたい。

西田哲学とは、西田幾多郎によって構築された哲学体系であるが、絶対無や矛盾的自己同一など、非常に難解な概念が用いられる一方、人生における根源的な問いを取り扱った哲学としても知られている。しかし、CiNii Articlesを用いて「福祉*西田哲学」「福祉*西田幾多郎」をキーワード検索すると、それぞれ5件、6件となっており（2022年8月10日現在）、福祉分野において西田哲学が積極的に取り扱われていないことが伺われる。しかしその中でも、例えば谷口泰史は、岡村重夫による岡村理論の背景にある社会と個人を一体的に捉える世界観や対立する二つの契機を統一する目的必然性を有する「生」の論理には、和辻哲郎の倫理学が思想的な基盤となるとしつつも、その背後には西田哲学が根本原理として機能していると捉えているし（谷口 2003）、牛津信忠は、福祉の人間観を分析するにあたり、西田哲学における主体性の否定による相互否定的関係に基づく相互依存関係が形成する「場所の論理」を展開し、矛盾的自己同一的な「多即一、一即多」の「場所」の重要性を指摘している（牛津 2014）。また田高寛士は、西田哲学の「無の自覚」や和辻倫理学の「空」の思想をソーシャルワーク実践

における差異生成のための理論として捉え、自己と自己、自己と他者との差異生成の根本原理を分析している（田高 2014）。

これらの議論からは、社会福祉実践理論の根本原理として西田哲学を用いることの可能性と有効性が示唆されるのではないだろうか。しかし、ここに挙げた先行研究については、あくまで社会福祉の理論的背景として西田哲学を取り上げており、ソーシャルワーク実践そのものに対して西田哲学を用いているわけではない。しかし筆者は、西田哲学を用いることで、ソーシャルワーク実践における CL と向き合う SWr の想像力や創造性、直観といった意識を明らかにすることができるのではないかと考えている。したがって、このような理由から、ここでは西田哲学を用いて CL と向き合う SWr の意識について検討を加えてみたいと思う。

4. ソーシャルワーカーの意識と西田哲学との関連

上記の研究方法を踏まえ、本研究では西田哲学における主要概念である「純粹経験」「場所」「私と汝」「自覚と行為的直観」「宗教意識」を取り上げ、SWr の意識との関連でそれぞれについて検討を行う。

4-1. 純粹経験

西田は『善の研究』の序において、「純粹経験を唯一の実在としてすべてを説明して見たい」（西田=2003 a: 6）と述べる。純粹経験とは、西田によれば「毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態」（西田=2003 a: 9）と定義される。その上で、「例へば、色を見、音を聞く刹那、未だ之が外物の作用であるとか、我が之を感じて居るとかいふやうな考のないのみならず、此色、此音は何であるといふ判断すら加はらない前をいふのである。それで純粹経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識と其対象とが全く合一して居る」（西田=2003 a: 9）とされる。ここから純粹経験とは、自己の判断や意識が加わる以前の、直接的な経験であると捉えることができる。西田は、このような純粹経験が分化発展し、対象との関係が加わることで、意志や思惟、判断といった様々な意識現象を生じると考える。しかし、意識現象の背後には常に純粹経験の統一作用が働いているのであり、これらに関係付けているものこそが純粹経験であるとされるのである。西田の言う「判断すら加わらない前」というのは、すなわちこのような意味や判断が生じる前の、しかもそれらの背後にある統一作用を前提としていえると考えられるのである。

これは、いわゆる意味や判断が加わる以前の事象そのものに近づくあり方である。しかし、西田の純粹経験はそれだけでなく、知識と対象が合一している状態としても捉え

られている。通常我々はどこまでも主観として判断をし、そのときの対象はどこまでも判断の対象として客観である。ところが、純粹経験では、対象は対象として存在せず、我と対象とは合一する。そこでは「主観-客観」の枠組みは存在せず、主は客であり、客は主となる。「経験するといふのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄て、事実に従うて知るのである」(西田=2003 a: 9)とされるように、そこには「自己の細工」を棄却することが求められる。しかし、我々にはすぐに何らかの意識現象が働いてしまうため、純粹経験の統一作用が崩れてしまうのである。このような純粹経験から分化発展する意識現象に対し、主客を合一する意識現象と捉えられるのが直観である。西田は『善の研究』では、これを知覚と直覚が合一した境地として知的直観という用語を用い、「真の知的直観とは純粹経験に於ける統一作用其物」(西田=2003 a: 35)としている。しかもこの立場は、「物我相忘じ、物が我を動かすのでもなく、我が物を動かすのでもない、たゞの世界、一の光景あるのみである」(西田=2003 a: 35)ともされる。西田はこのような境地を、画家が自ずと筆を走らせるようなあり方として捉えており、「この一物の会得が知的直観であつて、而もかゝる直覚は独り高尚なる芸術の場合のみではなく、すべて我々の熟練せる行動に於ても見る所の極めて普通の現象」(西田=2003 a: 35)と述べている。つまり、意識する刹那、すでに身体が動いているような、いわば「熟練せる行動」としてのエキスパートの境地がこの「知的直観」の立場であると言えよう。このような主客が合一するような意識状態がまさに純粹経験なのである。

ソーシャルワーク実践においても、CLの困難さを前に、自然と身体が動くような場面が生じる。例えばDV被害などを訴えているCLなどのように、身の危険に直面している場合、迅速に相談先などを紹介したり、活用できる制度やサービスを提供したりと、ライフプロテクションの理念のもと、緊急避難的に手立てを講じることが求められる。このようなとき、CLがSWrを動かしたのか、その逆か、判然としない意識の中で実践をしていることがある。いやむしろ、それはどちらであってもよく、CLの生命を守ると強く意識する刹那、実践に衝き動かされるのである。ソーシャルワーク実践の場面では、このような純粹経験と言えるような事態が生じうるのである。

4-2. 場所

上述のような純粹経験による「未だ主もなく客もない」状態を考えると、西田は「対象と対象とが互に相関係し、一体系を成して、自己自身を維持すると云ふには、かゝる体系自身を維持するものが考へられねばならぬと共に、かゝる体系をその中に成立せしめ、かゝる体系がそれに於てあると云ふべきものが考へられねばならぬ」(西田=2003 b: 415)とする。西田はこれを場所と呼び、「意識現象が互に相関係し相連結す

る」(西田=2003 b: 416-417) ような「意識の野」(西田=2003 b: 416) として捉えている。しかし、この「意識の野」を意識する「野」を考えた時、どこまでも「意識の野」を超越することはできないことになる。つまり、西田の言う場所とは、無限に広がる「意識の野」として考えられるのである。西田はこれを「無の場所」とし、「真の無の場所といふのは如何なる意味に於ての有無の対立をも超越して之を内に成立せしめるもの」(西田=2003 b: 424) としている。これは、「主客相没し物我相忘れ」た純粹経験の立場をさらに徹底したものと考えられる。つまり、「全く自己の細工を棄て、事実に従うて知る」のであり、「意識の野は真に自己を空うすることによつて、対象をありのまゝに映すことができる」(西田=2003 b: 425) 場所として考えられるのである。

このような「無の場所」として捉えられる場所は、単なる無意識とは異なる。無意識とは意識が有るにも拘わらず、「意識の野」の表面に現れてこない状態を指すが、西田の「無の場所」とは、「有無の対立をも超越」した立場である。つまり、「無限に自己の中に自己を映すといふことから、働くものを導き出すことができる」(西田=2003 b: 430) とされるように、自己の中で「無限に」広がり、そこから「働くもの」、すなわち意味や判断などが生じるような場所なのである。しかし、このような立場を究めていくと、「真に意識するものは所謂意識として限定せられないものをも、内に包むものでなければならぬ」(西田=2003 b: 437) とされるように、意識すら意識されない立場に行きつくことになる。このような立場については、西田も「而して真の無の立場といふのは、一つの理想に過ぎないから、内部知覚も単なる極限に過ぎない」(西田=2003 b: 438) と述べるように、確かに理想でしかない立場とも考えられるであろう。しかし、真の意識とは、そのような「極限」の場所から生じると考えられているのである。

このような立場に至るためには、「自己を空うする」こと、すなわち自己否定を伴った自己の自覚が必要となる。「自覚的意識面とは恰も対立的無の場所に当るであらう、我々が普通に意識面と考へて居るものは是である。併し我々は尚一層深く広く、有も無も之に於てある真の無の場所といふものを考へることができる、真の直観は所謂意識の場所を破つて直にかゝる場所に於てあるのである」(西田=2003 b: 475) とされるように、場所の立場は直観に通じることになる。西田は、「意識の根柢にかゝる直観がなければならぬ」(西田=2003 b: 466) とし、矛盾的対立を統一する純粹作用として直観を捉えている。このような直観を根底に置く意識とは、「無より有を生ずる、無にして有を含むといふことが、意識の本質」(西田=2003 b: 437) とされるように、ここから意志や判断、思惟など、あらゆる意識現象が生じると考えられる。西田はこれを「創造的無」(西田=2003 b: 438) と呼んでいるが、自己の創造性とはこのような「無の場所」から生じるものとして考えられているのである。なお、「空間も、時間も、力もすべて思惟の手段と考へられた時、与へられた経験其者の直に於てある客観的場所は超越的意

識の野といふ如きものでなければならぬ」(西田=2003 b: 440) とされるように、空間、時間、力は思惟の一つとして考えられるとともに、それらが生じる場所はそれを超えた「超越的意識の野」、すなわち「無の場所」においてあるとされる。このように、空間も時間も、「無の場所」から生じる意識として考えられているのである。

このように捉えたとき、ソーシャルワーク実践における SWr の想像力や創造性も「無の場所」から生じると考えられる。SWr は自己否定を伴った自覚によって「無の場所」を深く見つめることで、CL の立場を直観的に掴みうるのである。それにより、CL の「今、ここ」から過去を想像すると同時に未来を志向し、ミクロ実践の中にメゾ・マクロを包括した実践を創造することになるのである。

4-3. 私と汝

次いで、西田哲学における自他関係について考えてみる。西田によれば、「自己自身を限定するものは、自己自身の内に自己を有つと共に、絶対の他に於て自己を有つものでなければならぬ」(西田=2004 a: 479) とされる。限定とは、表現や形成、見る、などといった概念でも説明されるが、大きくは自己規定を意味する概念である。西田によれば、「自己が自己に於て自己を見ると考へられる時、自己が自己に於て絶対の他を見ると考へられると共に、その絶対の他は即ち自己であるといふことを意味してゐなければならぬ」(西田=2003 c: 302) とされる。ここにおいて、自己とは絶対の他を含みこんだものとして捉えられることになるのであり、「自己が自己において自己を見る」ということは、自己においてある自己から自己自身を見ると同時に、自己においてある絶対の他、すなわち汝から自己を見る、という二重性が考えられることになる。この過程は、他者においても同様である。すなわち、「かゝる過程は絶対の他の中に私を見、他が他自身を限定することが私が私自身を限定することであると考へることができる」(西田=2003 c: 305) のである。つまり、他者もまた他者においてある他者自身と他者においてある私から見られているのであり、それによって他者自身が自己規定しているということでもある。そして私は、そのようにある目の前の他者から実際に見られることによって、私自身を自己規定することになるのである。このように私が他者と対峙するとき、「私は汝を認めることによつて私であり、汝は私を認めることによつて汝である、私の底に汝があり、汝の底に私がある、私は私の底を通じて汝へ、汝は汝の底を通じて私へ結合するのである」(西田=2003 c: 297-298) とされる。これはいわば、他者の内にある私が、私自身の内にある私と通底し、私の内にある他者が、他者自身の内にある他者と通底する事態を意味する。このようにして、それぞれが各々の「底を通じて」結合するのである。これがいわゆる純粹経験や場所における主客合一の状態である。西田はまた、「私が内的に他に移り行くといふことは逆に他が内的に私に入つて来

るといふ意味を有つてゐなければならない」(西田=2003 c: 305-306)とも述べており、私においてある他者とは、私の「底を通じて」他者が私の内に「入つて来る」ような仕方の中で私の中に形成されることになるのである。

このような状態を考える際、「認める」ということ、すなわち他者との「応答」が重要な要素となる。西田は、「私は汝が私に応答することによつて汝を知り、汝は私が汝に応答することによつて私を知るのである」(西田=2003 c: 306)とする。その上で、「私といふ人格が汝といふ人格に直に応答することによつて私が汝を知る」(西田=2003 c: 306)のであり、「寧ろ汝と相争ふことによつて一層よく汝を知ると云ふことができる」(西田=2003 c: 306)とも述べている。つまりここでの応答とは、利害や打算といった駆け引きを前提としたものではなく、人格同士による応答として、相互に主張することで一層よく理解し合うことのできるような関係と捉えられる。そのように他者と応答することにより、純粹経験における「自己の細工」を棄却して主客合一する状態、すなわち自己自身への執着、いわば我執を棄てて他者を受け容れ、他者と合一するような意識状態に到ると考えられるのである。

ソーシャルワーク実践においても、CLの立場で考えると言われるが、そのためには西田の言うような「応答」を前提に、SWr自身の底にCLを「認める」ことが求められる。それにより、CLがSWrに内的に入ってくることになり、相互の底を通じて内的に「結合」するのである。その時はじめて、SWrはCLの痛みを自身のものとして共に痛むことができるのであるが、これについては考察において改めて検討を加えるものとする。

4-4. 自覚と行為的直観

上述のように、真の場所に到達するためには、自己の判断や思惟といった意識現象を一旦括弧に入れることが求められる。そのために必要となるのが、自己の自覚である。西田によれば、「自覚とは部分的意識体系が全意識の中心に於て統一せらるゝ場合に伴ふ現象である。自覚は反省に由つて起る、而して自己の反省とはかくの如く意識の中心を求むる作用である」(西田=2003 a: 146)とされる。自己とは純粹経験の立場では、意識の統一作用であり、その統一作用が自発自展することにより、思惟や判断といった様々な意識現象を生じることになる。自覚とは、様々な意識が統一せられた瞬間に生じる意識状態を指すのであり、それに到るためには「反省は深き統一に達する途である」(西田=2003 a: 153)とされるように、自己の反省、すなわち省察が求められることになるのである。ソーシャルワーク実践における省察も、このように捉えられる必要があるであろう。

こうした自覚は、西田の後期になると「自己が自己自身を考へる、考へるものと考へ

られるものが一である」(西田=2004 a: 466)とされるようになる。西田はこれを矛盾的自己同一と捉え、「相矛盾する両方向の自己同一が、自覚と云ふことである」(西田=2004 a: 479)とする。なお、このような自覚は直観によって看取されると考えられるが、『善の研究』において知的直観と捉えられていた直観は、後期になると、「知覚の如きものも行為的直観的でなければならない」(西田=2003 d: 224)として、行為的直観へと展開していくことになる。直観とは、「唯一的なるものと唯一的なるものが、相互否定的に結合する過程」(西田=2004 a: 491)であり、それは現在において過去と未来とが結合し、それによって自己が自己自身を創造するようなものである。このことは、「真の直観は創造的直観でなければならない、時を生む直観でなければならない」(西田=2004 a: 486)とされように、直観が時そのものをも生み出すような創造的なものとして捉えられることに繋がる。ここにおいて、我々の創造という行為が直観と結びつくことになるのである。

このような行為的直観は、「他の為に自己自身の消滅を自己存在の理由として成立すると云ふことが、表現すると云ふこと」(西田=2004 a: 499)とされるように、「自己自身の消滅」を「存在の理由」として、自己自身を表現、すなわち創造していくようなものと捉えられる。すなわち、反省によって自己が自己自身を対象とすることで、行為的直観的に自己の統一が図られるとともに、創造的自己の自覚として様々な意識現象が生じると考えられるのである。このように自己の自覚とは、事実を行為的直観的に自覚し、統一して行く方向性と、そのように統一された自覚の立場そのものをも反省していく方向性が、矛盾的自己同一的に同時に含まれた創造的自己の自覚として考えられているのである。

CLを前にソーシャルワーク実践を行うSWrにとっても、このような創造的自己の自覚が求められることになる。SWrは、実践することで行為的直観的に過去を含めた「今、ここ」にあるCLと自己の内で結合し、CLと痛みを共にする。それと同時に常にSWr自身の実践を省察し、自己自身を反省してCLとともに自らを対象化することで、CLの未来やあるべき生活世界を創造していくのである。このようにして、矛盾的自己同一的にソーシャルワーク実践そのものが創造されていくのである。

4-5. 宗教意識

西田は、『善の研究』の第四編を「宗教」とし、晩年最後の論文を「場所的論理と宗教的世界観」で終えていることから、生涯にわたって宗教意識を重大な関心事としていたことが理解できる。そもそも宗教意識とは、日常生活の中で誰もが一度はいだく感覚ではなかろうか。『善の研究』では、「宗教的要求は自己に対する要求である、自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共

に、絶対無限の力に合一して之に由りて永遠の真生命を得んと欲するの要求である」(西田=2003 a: 135)とされ、「場所的論理と宗教的世界観」では、「宗教の問題は、価値の問題ではない。我々が、我々の自己の根柢に、深き自己矛盾を意識した時、我々が自己の自己矛盾的存在たることを自覚した時、我々の自己の存在そのものが問題となるのである。人生の悲哀、その自己矛盾と云ふことは、古来言旧された常套語である。併し多くの人は深く此の事実を見詰めて居ない。何処までも此の事実を見詰めて行く時、我々に宗教の問題と云ふものが起つて来なければならないのである」(西田=2004 b: 312-313)とされる。ここでの自己矛盾とは、自己の死、すなわち一人称の死の自覚である。我々は、必ず死すべき存在として生を受けている。何者も永遠に生きることはありえない。「然るに、斯く自己の永遠の死を知ることが、自己存在の根本的理由であるのである」(西田=2004 b: 314)とされるように、一度的なる個として自己を自覚した時、「而して斯く自己が自己の永遠の死を知る時、自己の永遠の無を知る時、自己が真に自覚する」(西田=2004 b: 314)と言われるのである。このように、人生の悲哀や苦悩に直面し、自己自身の死、死するべく生きる自己の矛盾的存在たることを自覚したとき、宗教意識の発露、いわゆる発心が生じるのである。

このような自覚は、行為的直観的な自己の自覚を通じて、創造的自己の自覚へと通じるものである。このとき、創造的自己の自覚は神の自覚へと繋がることとされる。これは例えば『善の研究』においては、「実在の根柢たる神とは、この直接経験の事実即ち我々の意識現象の根柢でなければならぬ」(西田=2003 a: 144)とされ、「場所的論理と宗教的世界観」では、「我々の自己は、唯、死によつてのみ、逆対応的に神に接するのである、神に繋がると云ふことができるのである」(西田=2004 b: 315)とされる点に見ることができる。逆対応的とは、自己の死の自覚により、個物でありつつも超越、有限でありつつも無限といった矛盾的自己同一的なあり方として、しかも自己の能動性ではなく、あくまで「自己の細工」を棄てた「大いなる受動性」のうちに、神の呼声として神と繋がるような意である。西田は別の個所で、「絶対者は何処までも我々の自己を包むものであるのである、何処までも背く我々の自己を、逃げる我々の自己を、何処までも追ひ、之を包むものであるのである、即ち無限の慈悲であるのである」(西田=2004 b: 344)と述べており、ここにおいて神は「無限の慈悲」として、我々を包み込むものとして捉えられることになる。しかもこれは、「如何なる宗教に於ても、何等かの意味に於て神は愛」(西田=2004 b: 345)とされるように、あらゆる宗教に通じると考えられる。その上で、「我々が神を知るのは唯愛又は信の直覚に由りて知り得るのである」(西田=2003 a: 159)と言われるように、宗教意識とはこのような「愛」や「信」を直観的に自覚することとして考えられているのである。

このような宗教意識は、ソーシャルワーク実践におけるスピリチュアリティの自覚に

通じるものである。例えば自らの死を前にして、死するべく生きる自己の矛盾的存在に苦悩する CL の場合、超越的存在としての絶対者にすがり、それによって自己の拠り所を求めざるをえない事態が生じうる。そのような CL を前にしたとき、SWr は何もできない無力さに苛まれることになる。しかし、SWr 自身も絶対者にすぎることによって、共に絶対者の「無限の慈悲」に包まれようと意識する。いやむしろ、「無限の慈悲」に包まれるしかないのである。ソーシャルワーク実践における宗教意識とは、どうにもならない場面における、絶対者による「愛」や「信」を前提とした SWr の意識と言えるのである。

5. 考察及び今後の課題

以上これまで、ソーシャルワーク実践における SWr の意識を分析すべく、西田哲学における主要概念について検討を行ってきた。ここではこれらを基に、改めてソーシャルワーク実践において CL と向き合う SWr の意識について考察を加えてみたい。その上で、本研究の限界及び今後の課題について検討してみようと思う。

5-1. 西田哲学に基づくソーシャルワーカーの意識

5-1-(a). 省察的实践

西田によれば、純粹経験の立場とは、「主客相没し物我相忘れ天地唯一実在の活動あるのみなるに至つて、甫めて善行の極致に達するのである。物が我を動かしたのもよし、我が物を動かしたのもよい。雪舟が自然を描いたものでもよし、自然が雪舟を通して自己を描いたものでもよい」（西田=2003 a: 125）と言われるような境地とされる。この立場からソーシャルワーク実践を考えたとき、SWr が CL の目的に合わせて実践するでもよし、CL が SWr を通じて目的を達成するでもよい、いわば「主客相没し物我相忘れ」たときにはじめて、自ずと実践という行為が立ち現れてくるものとして考えることができるであろう。

しかしソーシャルワーク実践では、CL はどこまでも援助の対象として捉えられることになる。上述のパートナーシップにおいても、協働的關係とは言いながらも、ソーシャルワーク実践の対象はやはり CL である。しかし、純粹経験の立場では、主は客となり、客は主となる。これは、SWr が CL を援助しながら、SWr が支えられるような關係であり、例えばカンダが「ソーシャルワーカーがクライアントを援助するとき、私たちもまた助けられている」（Canda & Furman = 2014: 56）というような關係として捉えることもできる。これはまた、坪上宏が指摘する、CL に変化を生じるときに SWr にも自己変容を生じるような、CL と SWr のそれぞれに相互変容をもたらす循環的關係

(坪上=1998: 283-284)にも通じる。しかし、純粹経験はこのような関係に留まらない。つまりそれは、「未だ主もなく客もない」状態なのである。ソーシャルワーク実践では、援助対象や目的、その過程が実践の前提となるが、そのような対象や判断が生じる以前、いわば CL が何らかの困難に直面しているという事実そのものが重要になる。そのような他者を前にしたとき、その事実によって私自身も痛み、動かされる。そのときの SWr としての私は能動的に動くのではなく、いわば受動的に衝き動かされることになるのである。

このような境地に到るために、SWr には常に自己の反省が求められる。反省と言えば、例えばショーン (Donald A. Schön) の「行為の中の省察」が想起される。ショーンによれば、専門家は常に自身の実践を反省し、「行為の中の省察」に基づいた実践を積み重ねる必要があるとされる (Schön=2001)。ここでは、SWr はただ漫然と実践を重ねるのではなく、反省しながら実践を繰り返す中で、直観力や感受性を徐々に身につけていくと考えられるのである。しかし西田哲学では、ショーンの言うような「行為の中の省察」の立場に留まることはない。西田によれば、いわゆる創造的な自己が常に自己自身を反省し、行為的直観的な自覚において主客合一の立場に到るとされる。SWr が「自己の細工」、すなわち我執を棄てて CL と応答し、行為的直観的に CL を見るとき、そこには CL の過去と未来が折り重なった「今、ここ」が創造されることになる。まさに、「無の場所」として想定されるような場所において、CL の過去を前提に、未来を先取りした実践、さらには CL を取り巻く生活環境や人的ネットワーク、制度やサービスといった社会資源など、メゾ・マクロの広がりを意識した実践が可能になるのである。「省察の実践」とは、行為的直観的な創造的自己の自覚と絶え間ない反省という不断の運動として捉えられるのである。

5-1-(b). クライアントとの相互関係性

ソーシャルワークの実践場面では、時折「相手の身になって考える」と言われることがある。「相手の身になって考える」とは、CL の置かれた状況を SWr 自身に置き換えて理解するあり方として捉えられるが、市川浩はこのことを、「個々の身のはたらきの図式が構造的にアナログカルになり、構造的に同一化する」(市川=1993: 94-95) あり方として捉えている。このような同調は、相手と同じ所作や態度、表情を取るとされる同型的同調と、相手の所作に応答し、それに対応する態度や表情を取る応答的・役割的同調に分類される。そして、それらの同調はさらに外面に表出する顕在的同調と、内面的に同調が行われている潜在的同調とに分けられる。いずれにしても、このような同調は無意識レベルで生じることが多いとされ、共感もこのようなあり方として捉えることができるとしている (市川=1993: 94-100)。深田耕一郎も、「『人の身になる』とは、間身体的な同調・同期 (Synchronization) を基盤にした他者理解のこと」(深田 2021:

114) と述べているが、であるとすれば、このような間身体的な同期性・非同期性はいかにして看取できるのか。

例えば石川勇一は、知性や五感によって対象として認識した現実をリアリティ、感覚的・直観的情報として感受される動きをアクチュアリティとし、「私たちが体験している現実には、完了形として対象化されたリアリティと、現在進行形で対象化以前のアクチュアリティの二義性が重ね合わされている」(石川 2007: 171) としている。リアリティとアクチュアリティは、もともと木村敏が用いている概念であるが(木村 1994 a = 2000; 木村 1994 b), 木村もまた、「リアリティが現実を構成する事物の存在に関して、これを認識し確認する立場から言われるのに対して、アクチュアリティは現実に向かってはたらきかける行為のはたらきそのものに関して言われる」(木村 1994 a = 2000: 13) と述べている。すなわち、対象化されたリアリティと同時に、現在進行中のアクチュアリティによって、我々は他者の中に息づく私の声を感覚的・直観的に感受するのである。石川によれば、このような自他関係のあり方は図1のような構造で捉えられている。

こうしたCLとSWrの関係性は、身体的感覚として捉えられるものである。SWrには、このような通路を通じてもたらされるCLの微細な情報やその変化に気づく感受性が求められる。特に、第1次通路とされるアクチュアリティは、言語や対象認識で捉えることのできない直観的な雰囲気のようなものであり、したがって科学的かつ客観的指標をもって評価できるようなものではないのである。

このことを、改めて西田哲学に基づいて考えてみる。西田は自他関係を、「私が内的に他に移り行くといふことは逆に他が内的に私に入つて来る」と簡潔に述べているが、私自身が自己規定するためには、「自己が自己において自己を見る」必要がある。そのためには、現実には他者から私が見られるリアリティが一つの契機となる。しかもこのリアリティは、私の内的に創造された他者像と同期することにより、「他が内的に私に入つて来る」ことになり、私は内的に他者と結合する。これは逆も同様で、他者の内に創造された私の像と現実の私が反響し、私もまた同時に「内的に他に移り行く」ことにな

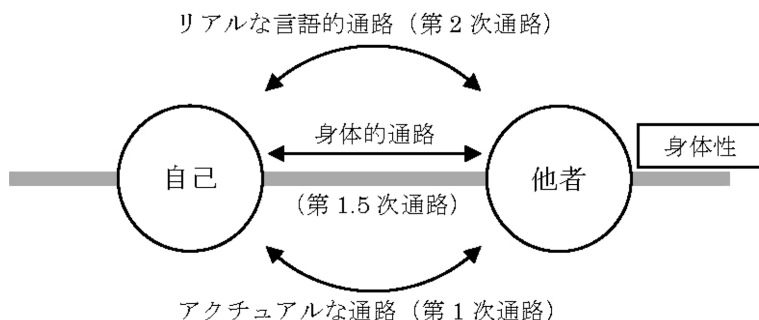


図1 他者との交流における3つの通路 (石川 2007: 179)

リアルな言語的通路（第2次通路）＝対話（応答）

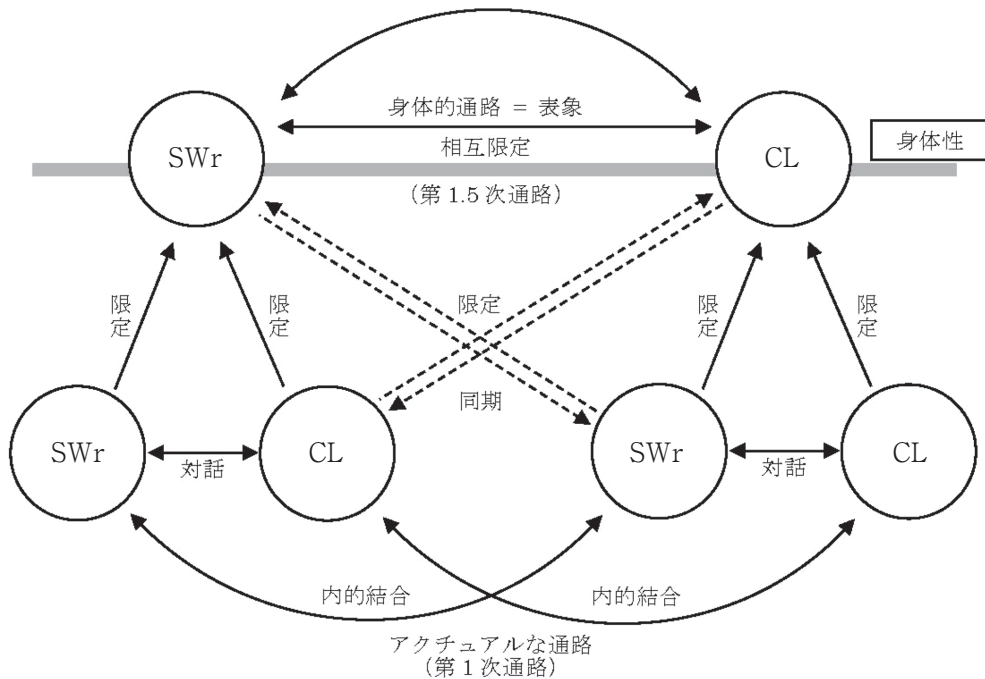


図2 西田に見る自他の関係性（筆者作成）

るのである。ここに、相互の内的な結合の過程が捉えられる。このように自己の内に他者と結合すると、自己の内にある自己と他者との応答が形成されることになる。そのような内的応答により、私自身の自己規定が促されるのである。これは他者も同様であり、このような西田に見る自他関係のあり方は、図2のように図式化できると考えられる。ここにおいて、私は自己の内に他者と結合するとともに、他者の内に存在する私を想像し、「相手の身になって考える」ことに繋がるのである。

5-1-(c). 共感・信頼・パートナーシップ

ここで改めて、共感や信頼、パートナーシップについて考えてみたい。共感とは SWr が CL の情緒的・感情的反応を理解するだけでなく、CL 自身が今置かれている現実の意味を理解し、了解する相互のあり方として、信頼とは CL が SWr を知識と技術を持つ専門職として信頼するだけでなく、SWr が CL の可能性や力を信頼するあり方として、いわば CL と SWr との相互関係の中で捉えられた。上述のように、西田に従えば、私は私の内に私自身とともに他者を認め、内的な私と他者から私自身が限定されることになる。これは他者も同様である。そして、私が他者の中に私を認めるとき、私の内にある私と他者の内にある私が内的に結合する。さらに、私の内にある他者もまた同様で、他者の内にある他者自身と内的に結合する。このようにして、自他のそれぞれ

に「相互共感」が生じることになるのである。また、自己と他者はそれぞれに人格的応答を行うのであり、それによって「よく汝を知る」ことが可能になる。このようにして、内的な結合が相互により強固なものとなり、それぞれに対する相互の信頼も高まることになるのである。

次いでパートナーシップであるが、ここでは専門職がその権威を下ろし、CLがエンパワメントにより力を持ち、共に「弱さ」を抱える者として、共に学び合うことが求められた。その際、対話、すなわち相互の応答が前提となるが、これは言語的やり取りに限ることはない。むしろ、身体的表象による応答が重要なのであり、SWrにはこのような応答に気づく感受性が求められるのである。このように、相互に応答がなされる時、SWrはCLのまなざしに曝露されることになり、必然的に他者に対して〈語ること〉の責任が問われることになる。いわば、CLから専門職であることを求められるのである。

ここにおいて、「一人の人間として」CLに出会うSWrは、それでもやはり知識や技能を有する専門職ということになり、結果として人間であるSWrと専門職であるSWrとの間にジレンマを生じることになる。このことは、窪田暁子がSWrのあり方を「共感する他者」としている視点にも通じるであろう（窪田 2013）。すなわち、SWrは共に「弱さ」を抱える一人の人間としてCLの「生の困難」に共感しつつも、やはり専門職としてCLの前にあり続けなければならないのである。その結果、SWrは共に「弱さ」を抱える一人の人間としてCLの「生の困難」に共感しつつも、専門職としてあるというジレンマに陥ることになる。パートナーシップとは、このように矛盾した関係性として考えられるのである。

しかし、西田哲学によれば、このような矛盾した自己も「今、ここ」において矛盾的自己同一的に統一される。例えば純粋経験でも見たように、SWrがCLの目的に合わせて実践するでもよし、CLがSWrを通じて目的を達成するでもよいのである。すなわち、ここで問われているのは、「主客相没し」たときに自ずと生じるような実践のあり方なのである。これはSWrによる一方的な実践ではなく、CLとSWrが相互に人格的応答をすることで生じるようなものでもある。人格的応答によりSWrが自己自身を滅して自己の内なる他者と向き合うとき、CLの「生の困難」が浮かびあがる。SWrは、CLの抱える「生の困難」に直面したとき、自ずと身体が動くような仕方でも、実践に衝き動かされるのである。ソーシャルワーク実践におけるCLとSWrとの関係性は、このように相互に内的に結合するようなあり方で「相互共感」や「相互信頼」を生じうる。それと同時に、SWrが一人の他者として突き放しつつも見守り続けることで、CL自身が困難に直面しながらも自らの人生を営んでいくような関係性が求められるのである。これはいわば、自他一元でありつつも自他二元、自他二元でありつつも自体一元と

いった、自他不二の関係としても捉えることができる。SWr は行為的直観的に CL と自他合一すると同時に、そのような自己を反省することで自己自身を対象化して事実そのものを捉えるのである。ソーシャルワーク実践とは、このように矛盾的自己同一的に行われるのであり、ここにおいてパートナーシップを超えた相互の関係性を見ることができるのである。

5-1-(d). スピリチュアリティの気づき

西田によれば、自己の死を自覚したとき、自ずと宗教意識の発露、いわば発心が生じるとされる。しかもそれは、私が神を求めるのではなく、神の呼声として神と繋がるような仕方では生じるものでもある。西田は、「単に我々の自己を超えたもの、我々の自己に外的なるものについては、我々の自己は苦まない。唯、それが我々の自己存在に関するもの、即ち我々の生命に関するものである時、それについて苦むのである」(西田=2004 b: 327) と述べ、特に自己の死、一人称の死を自覚したとき、自己矛盾の極致として、「そこに我々の真の自覚的自己がある」(西田=2004 b: 324) とする。これは窪寺が指摘するスピリチュアリティの気づきにも繋がるであろう。

このような宗教意識は、「我々の個的自己、人格的自己の成立の根柢には、絶対者の自己否定と云ふものがなければならない。真の絶対者とは単に自己自身の対を絶するものではない。何処までも自己自身の中に自己否定を含み、絶対的自己否定に対することによつて、絶対の否定即肯定的に自己自身を限定するのである」(西田=2004 b: 324) とされる。ここでは、絶対者としての神の自己否定により、神の創造に触れることができると考えられており、このようにして作られたもの、生かされてある自己の自覚が生じるとされる。いわば、「仏あつて衆生あり、衆生あつて仏ある」(西田=2004 b: 324-325) のであり、これはまさに西平が言うような「大いなる受動性」への直観であり、自覚である。西田は、「我々の自己の根柢には、何処までも意識的自己を超えたものがある」(西田=2004 b: 331) とし、具体的に鈴木大拙の霊性(鈴木=2010)を挙げて説明している。このように、自己の根底にある霊性の事実、すなわちスピリチュアリティが宗教意識の発露へと繋がる契機として考えられているのである。

そもそも我々は、「自己存在に関するもの」「我々の生命に関するもの」について苦しむのであり、そのような苦悩によって宗教の問題が生じると考えられる。例えば西田は、「良心と云ふものも、我々の自己を超えたものである。併しそれは我々の自己を内から超えたものである。それだけに良心の呵責と云ふものは、我々の自己を生命の底から振り動かすのである」(西田=2004 b: 327) として、自己の根底から苦悩する「良心の呵責」を取り上げている。ソーシャルワーク実践においても、前述のように自らの死を前にした CL と向き合うとき、SWr 自身の無力さに打ちひしがれるとともに、絶対者の「無限の慈悲」に包まれざるを得ない事態が生じうる。また、例えば担当していた

CLの自死といった悲劇的結末を迎えたとき、SWrは良心の呵責に苛まれることになるかもしれない。確かに、CLはSWrにとっては他者であり、CLの死は一人称の死の自覚ではない。しかし、CLとの関係が深ければ深いほど、CLの死はSWrにとって二人称としての死となる。そのような事態と向き合うとき、CLの不在を悲しむと同時に、自死を避けられなかった後悔と自責の念が大きくなっていく。それにより、SWr自身の自己存在の矛盾を自覚することとなり、結果として、自らのスピリチュアリティの気づきへと到ることになるのである。

自己のスピリチュアリティに気づき、宗教意識に目覚めたとき、西田の言うように自己の底で「逆対応的に神に接する」ことになる。このときの神とは、キリストや仏といった「如何なる宗教」における神であっても良い。もちろん、自身の先祖や先立った他者であっても良い。「我々が神を知るのはただ愛または信の直覚に由りて知り得る」とされるように、そのような超越者と自己が合一する直覚こそが自身のスピリチュアリティの気づきなのである。「我々が物を愛するといふのは、自己をすて、他に一致するの謂である。自他合一、其間一点の間隙なくして始めて真の愛情が起るのである」(西田=2003 a: 157)とされるように、自己を棄て、意識の底で超越者と合一するのである。SWrはこのようにして、CLの実存的苦痛を受け止め、自他合一的にともに苦しむとともに、それでもどうにもならない事態を前に自らの無力さに苛まれつつ、絶対者による「愛」や「信」といった大いなる受動性に超え包まれることになる。スピリチュアリティとは、このようなSWrの意識として考えられるのである。

5-2. 本研究の限界及び今後の課題

以上これまで、ソーシャルワーク実践におけるCLを前にしたSWrの意識について、西田哲学における諸概念を中心に検討を加えてきた。そこには、SWrの意識の底でCLと主客合一するような状態において、SWrがCLを援助しながらも、SWrが支えられるような相互関係、CLの「生の困難」を前に自ずと衝き動かされるSWrの実践を見ることができた。また、そのような場所において、自己の永遠の死を自覚することで生じる宗教意識や、その前提としてのスピリチュアリティに気づくことで、CLの痛みや苦しみを自らのものとして受け止め、CLと共に痛むと同時に、それでも専門職としてのSWrであるという、パートナーシップを超えた自他不二の関係性も明らかになった。さらに、このようにCLと向き合うべく、常にSWrが「自己の細工」、いわば我執を棄ててCLと人格的に応答し、自己の底にCLを認めつつも、不断に反省を繰り返し、自己を対象化するSWrの矛盾的自己同一的な「省察的实践」も整理することができた。このようにして、自己の底にCLを見るとき、そこにはCLの過去と未来、そして現在の生活世界といった時間と空間が折り重なったCLの「今、ここ」が創造されること

になる。このような場所において、SWrの創造性と想像力が生じるのである。しかし、そのような意識状態はすぐに様々な意識現象が生じることによって崩れてしまい、結果的にSWrによる自身のための実践になりかねない。だからこそ、SWrには自己の実践を常に振り返り、自己自身を省察するとともに、行為的直観的に自己自身を深く見つめる自覚的姿勢が求められるのである。

本論では西田哲学に基づき、ソーシャルワーク実践におけるSWrの意識を検証してきた。しかし、西田哲学に依拠していることもあり、結果として、抽象的な議論に終始してしまい、実際の実践の事実在即した検討が欠けたものとなってしまっている。しかもここでの議論は、ソーシャルワーク実践に特化した分析とは限られず、むしろ対人援助全般に通じる議論であるとの批判も想定できる。したがって、今後はソーシャルワーク実践に特化し、特に個別事例やエキスパートのSWrによる実践の実際などといった実践の事実在即した形で分析を加えることにより、本論で明らかにしたSWrの意識と実践との関連性を明らかにすることが課題であると考えている。

引用・参考文献

- Anderson, Harlene and Goolishian, Harold (1992), Client is the Expert, McNamee, Sheila and Gergen, Kenneth J. eds, *Therapy as social construction*, Sage Publications, Inc, 22-29. (=1997, 野口裕二・野村直樹訳「クライアントこそ専門家である—セラピーにおける無知のアプローチ—」『ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践』金剛出版, 59-88).
- Aptekar, Herbert H. (1941), *Basic concepts in social casework*, Chapel Hill: University of North Carolina Press. (=1968, 黒川昭登訳『機能主義ケースワーク入門』岩崎学術出版社).
- Biestek, Felix Paul (1957), *The Casework Relationship*, Loyola University Press. (=2006, 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳『ケースワークの原則』誠信書房).
- Bland, Robert, Laragy, Carmel, Ros Giles and Scott, Virginia (2006), Asking the customer: exploring consumers' views in the generation of social work practice standards, *Australian Social Work*, 59(1), 35-46.
- Canda, Edward R. and Furman, Leola D. (2010), *Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping*, 2nd ed., Oxford University Press. (=2014, 木原活信・中川吉晴・藤井美和監訳『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か：人間の根源性にもとづく援助の核心』ミネルヴァ書房).
- Compton, Beulah R. and Galaway, Burt (1999), *Social work processes*, 6th ed, Pacific Grove: Brooks/Cole Publishing Company.
- Freedberg, Sharon (2007), Re-examining empathy: A relational-feminist point of view, *Social Work*, 52(3), 251-259.
- 深田耕一郎 (2021) 「障害 (ハンデ) はゲームをワクワクさせる：身体に依拠したソーシャルワークのために」『ソーシャルワーク研究』47(2), 110-119.
- Grof, Stanislav and Grof, Christina (1990), *The stormy search for self: A Guide to Personal Growth through Transformational Crisis*, G. P. Putnam's Sons, Los Angeles: Tarcher. (=1997, 安藤治・吉田豊訳『魂の危機を越えて：自己発見と癒しの道』春秋社).
- Hamilton, Gordon (1940), *Theory and Practice of Social Casework*, Columbia Univ. Press. (=1960, 四宮恭二監修・三浦賜郎訳『ケースワークの理論と実際』上巻, 有斐閣).
- 林貴啓 (2011) 『問いとしてのスピリチュアリティ：「宗教なき時代」に生死を語る』京都大学学術出版会.

- 狭間香代子 (2001) 『社会福祉の援助観：ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント』 筒井書房。
- 平塚良子編 (2022) 『ソーシャルワークを「語り」から「見える化」する：7次元統合体モデルによる解析』 ミネルヴァ書房。
- Hollis, Florence (1964), *Casework: a psychosocial therapy*, Random House Inc, New York. (=1966, 黒川昭登・本出祐之・森野郁子訳『ケースワーク：社会心理療法』 岩崎学術出版)。
- Horowitz, Richard (1991), Reflections on the casework relationship: Beyond empiricism, *Health & Social Work*, 16(3), 170-175.
- 市川浩 (1984=1993) 『〈身〉の構造：身体論を超えて』 講談社。
- 市瀬晶子・木原活信 (2013) 「自殺におけるスピリチュアルペインとソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』 38(4), 248-254.
- 稲沢公一 (2017) 『援助関係論入門：「人と人との」関係性』 有斐閣アルマ。
- 石川勇一 (2007) 「心理療法実践とスピリチュアリティ：アクチュアリティへの接近」 安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学：心の時代の学問を求めて』 せせらぎ出版, 167-185.
- 岩崎晋也 (2014) 「エンパワメント：終わらなき対話を生み出し続ける理念」 稲沢公一・岩崎晋也『社会福祉をつかむ (改訂版)』 有斐閣, 261-270.
- Johnson, Louise C. and Yanca, Stephen J. (2001), *Social work practice: a generalist approach, 7th ed.*, Allyn and Bacon, Boston. (=2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』 ミネルヴァ書房)。
- 加茂陽・横田恵子 (2003) 「議論」 加茂陽編『日常性とソーシャルワーク』 世界思想社, 177-209.
- Keefe, Thomas (1976), Empathy: the critical skill, *Social Work*, 21(1), 10-14.
- 木原活信 (2003) 『対人援助の福祉エートス：ソーシャルワークの原理とスピリチュアリティ』 ミネルヴァ書房。
- 木原活信 (2021) 「ソーシャルワークと身体／身体性」『ソーシャルワーク研究』 47(2), 97-109.
- 木村敏 (1994 a=2000) 『偶然性の精神病理』 岩波書店。
- 木村敏 (1994 b) 『心の病理を考える』 岩波書店。
- Kirsh, Bonnie & Tate, Ellen (2006), Developing a comprehensive understanding of the working alliance in community mental health, *Qualitative Health Research*, 16(8), 1054-1074.
- 窪寺俊之 (2004) 『スピリチュアルケア学序説』 三輪書店。
- 久保絃章 (1988) 『自立のための援助論：セルフ・ヘルプ・グループに学ぶ』 川島書房。
- 久保絃章 (2002=2004) 「ソーシャルワークとセルフヘルプ・グループ」『セルフヘルプ・グループ：当事者へのまなざし (コレクション4)』 相川書房, 137-146.
- 窪田暁子 (2013) 『福祉援助の臨床：共感する他者として』 誠真書房。
- Lévinas, Emmanuel (1978), *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff, Kluwer Academic Publishers B. V. (=1999, 合田正人訳『存在の彼方へ』 講談社)。
- Meagher, Janet A. M. (2000), *Partnership or pretence: a handbook of empowerment and self advocacy for consumers of psychiatric services and those who provide or plan those services, 3rd ed.*, Psychiatric Rehabilitation Association. (=2015, 山本和儀・栄セツコ・平田はる奈訳『コンシューマーの視点による本物のパートナーシップとは何か？：精神保健福祉のキーコンセプト』 金剛出版)。
- 日本ソーシャルワーカー連盟 (JFSW) 「倫理綱領」 (<http://jfsw.org/code-of-ethics/>, 2022. 1. 11 閲覧)。
- 西田幾多郎 (1911=2003 a) 『善の研究』『西田幾多郎全集 第一巻』 岩波書店, 3-159.
- 西田幾多郎 (1932=2003 b) 「場所」『西田幾多郎全集 第三巻』 岩波書店, 415-477.
- 西田幾多郎 (1932=2003 c) 「私と汝」『西田幾多郎全集 第五巻』 岩波書店, 267-333.
- 西田幾多郎 (1937=2003 d) 「行為的直観」『西田幾多郎全集 第八巻』 岩波書店, 215-238.
- 西田幾多郎 (1943=2004 a) 「自覚について」『西田幾多郎全集 第九巻』 岩波書店, 465-532.
- 西田幾多郎 (1943=2004 b) 「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎全集 第十巻』 岩波書店, 295-367.
- 西平直 (2007) 「スピリチュアリティ再考：ルビとしての『スピリチュアリティ』」 安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学：心の時代の学問を求めて』 せせらぎ出版, 71-90.

- 岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』 全国社会福祉協議会.
- 大谷京子 (2012) 『ソーシャルワーク関係：ソーシャルワーカーと精神障害当事者』 相川書房.
- 大塚達雄 (1960) 『ソーシャルケースワーク：その原理と技術』 ミネルヴァ書房.
- 尾崎新 (1999) 「『ゆらぐ』 ことのできる力：『ゆらぎ』 を実践に活用する方法」 尾崎新編 『「ゆらぐ」 ことのできる力：ゆらぎと社会福祉実践』 誠信書房, 291-325.
- Perlman, Helen H. (1957), *Social casework: a problem-solving process*, University of Chicago Press. (=1958, 松本武子訳『ソーシャル・ケースワーク』 全国社会福祉協議会).
- Richmond, Mary E. (1917), *Social diagnosis*, Russell Sage Foundation. (=2012, 杉本一義監修・佐藤哲三監訳『社会診断』 あいり出版).
- Richmond, Mary E. (1922), *What is social case work?: an introductory description*, Russell Sage Foundation, New York. (=1991, 小松源助訳『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』 中央法規出版).
- Rogers, Carl. R. (1957) The Necessary and Sufficient Condition of Therapeutic Personality Change, *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95-103. (=1966, 伊藤博編訳「パースナリティ変化の必要にして十分な条件」『ロージャズ全集4：サイコセラピの過程』 岩崎学術出版, 117-139).
- 佐藤俊一 (2004) 『対人援助の臨床福祉学：「臨床への学」から「臨床からの学」へ』 中央法規出版.
- 佐藤俊一 (2020) 『スピリチュアリティを目覚めさせる：均質化する社会を現象学から問う』 川島書店.
- Scheyett, Anna and Diehl, Matthew J. (2004), Walking our talk in social work education: Partnering with consumers of mental health services, *Social Work Education*, 23(4), 435-450.
- Schön, Donald A. (1983), *The reflective practitioner: how professionals think in action*, Basic Books. (=2001, 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵：反省的実践家は行為しながら考える』 ゆるみ出版).
- 鈴木大拙 (1944=2010) 『日本の靈性』 角川文庫.
- 田高寛士 (2014) 「差異生成論とソーシャルワーク」 大下由美・小川全夫・加茂陽編 『ファミリー・ソーシャルワークの理論と技法：社会構成主義的観点から』 九州大学出版会, 56-77.
- 谷口泰史 (2003) 『エコロジカル・ソーシャルワークの理論と実践：子ども家庭福祉の臨床から』 ミネルヴァ書房.
- 坪上宏 (1984=1998) 「援助関係論」 『援助関係論を目指して：坪上宏の世界』 やどかり出版, 268-313.
- 浦河べてるの家編 (2002) 『べてるの家の「非」援助論：そのままがいいと思えるための25章』 医学書院.
- 牛津信忠 「自我論と人格主体論の現象学的再考 [第II部 (2)]：社会福祉の人間観の要諦における深化的考察」 『聖学院大学論叢』 第26巻 (第2号), 67-93.
- 横山登志子 (2008) 『ソーシャルワーク感覚』 弘文堂.

A Study on the Relationship between Client and Social Worker in Social Work Practice:

Based on the Philosophy of Kitaro Nishida

Keiichi Hatori

The relationship between the client and the social worker is the basis of social work practice. In recent years, social workers in social work practices have been required to consider the spirituality of the client, and it is necessary to reexamine the relationship between the two. In this paper, we analyzed previous studies on the practice of social work and surveyed relationships such as empathy, trust and partnership, and consideration for spirituality. Based on that, I reconsidered the relationship between the client and the social worker using the concepts of Kitaro Nishida's philosophy. As a result, social workers are expected to give up self-attachment and respond to their clients in a way according to social workers' conscience, and unite act-intuitively with client within social workers' self, triggered by spirituality, while constantly reflecting on themselves. It became clear that a way to do this was required.

Key words: Social work practice, Relationships, Spirituality, Reflective practice, The philosophy of Kitaro Nishida

